第6回日本サッカー殿堂掲額者

〔特別選考による掲額者〕

高　橋　英　辰

大　谷　四　郎

丸　山　義　行

〔投票選考による掲額者〕

松　本　育　夫

2009/8/11

高橋英辰　Hidetoki TAKAHASHI

＜主な掲額理由＞　日本代表監督として日本サッカーの強化に尽力、日立の監督としても数々の業績を残す

●1916年4月11日、福島県生まれ

小学校4年でサッカーを始め、刈谷中学、早稲田高等学院、早稲田大学を経て、
1941年より日立製作所でプレー。

1955年に早稲田大学監督に就任し、関東大学リーグ2連覇。1957年、第3回アジア競技大会に向けた強化のための中国遠征で日本代表を率い、1959年、日本ユース代表を初めて編成して臨んだ第1回アジアユース大会では3位の成績を収めた。
1960年正式に日本代表監督に就任。FIFAワールドカップチリ大会予選、第5回ムルデカ大会、第4回アジア競技大会などを戦い、D.クラマーコーチとともに2年間、東京オリンピックに向けた日本代表の強化に取り組んだ。

1969年、低迷の続く日立の監督に就任。当時のJSLは、東洋工業4連覇の後、スピードを重視した三菱と、個人技主体のヤンマーがリードする時代に入っていたが、高橋はサッカーの不滅の基本である「走る」ことを強調、スターのいないチームを「入れ替え戦組」から一挙に上位に押し上げるとともに、1972年度にはJSL1部、天皇杯全日本選手権ともに初優勝を果たして「基本の重要性」を再認識させた。1975年度第55回天皇杯全日本選手権にも優勝するなど、創部以来関わってきた日立のサッカーを再興し、柏レイソルへの基礎を固め、1976年に退任。

1979～86年JSL総務主事として活躍、リーグ事務所をサッカー協会内から独立させ、斬新なデザインのリーグポスターで話題を呼ぶなど、リーグの活性化に力を注いだ。

2000年没

（日立）1972年度第52回天皇杯全日本選手権優勝

（日立）1975年度第55回天皇杯全日本選手権優勝

■大谷四郎　Shiro OTANI

＜主な掲額理由＞　サッカー記者として日本のサッカーの普及と強化に尽力

（左が大谷四郎）

●1918年4月23日、兵庫県生まれ

兵庫県立第一神戸中学校で2年連続全国大会優勝、第一高等学校を経て、1939年東京帝国大学に入学。得点力のあるFWとして活躍し、関東大学リーグ優勝2回、東西学生王座決定戦優勝1回。

戦後は、大阪サッカークラブや東大LBでプレーを続ける一方、関西協会所属のコーチとしても活躍。1947年東西対抗（天覧試合）では関西の若手を鍛え、ベテランを擁する関東と互角の勝負をみせた。
また、1953年西独ドルトムント国際大学スポーツ週間（現ユニバーシアード競技大会）では、コーチ（総務兼）として次世代の選手の育成に携わった。

1948年に朝日新聞社運動部記者となり、紙面を通じてサッカーの普及につとめ、一方で、全日本実業団選手権、朝日招待サッカー（国内試合）、朝日国際サッカーなど朝日新聞社の後援事業の開催・運営にも尽力した。1973年からはフリーランスとしてサッカー専門誌を中心に執筆活動を続け（本名とともにペンネーム「秋庭亮」でも執筆）、組織・運営から技術・指導に至る幅広い視野で日本サッカーの将来を予見しつつ、着実な進歩を説いた。

その先見性は現場にも活かされ、1970年結成の社団法人神戸FCでは、初めての年齢別会員登録制度を採用して、後のサッカー界変革の布石を打った。

1990年没

1953年1953年西独ドルトムント国際大学スポーツ週間集合写真

前列左から2人目が大谷四郎

■丸山義行　Yoshiyuki MARUYAMA

＜主な掲額理由＞　国際審判員。日本人初のワールドカップ審判員。審判技術の向上と審判員育成に尽力

●1931年10月28日、栃木県生まれ

栃木県・今市高校、中央大学でプレーした後、審判員としてのキャリアをスタートさせ、日本のトップレフェリーの一人として活躍。1961～76年国際審判員。

1964年東京オリンピックで線審（副審）、1968年メキシコオリンピックでは、グループリーグ・ハンガリー対ガーナ戦の主審をつとめた（オリンピックでの主審は、東京オリンピックでの福島玄一に次ぎ日本人として2人目）。1970年、FIFAワールドカップメキシコ大会では、日本人初となるワールドカップでの審判に任命され、ペルー対ブルガリア戦等2試合で線審（副審）をつとめた。1979年、15年間に及ぶ国際審判としての実績が認められ、FIFA審判特別功労賞受賞。
JSL1部では、主審62試合（1965～76年）。

その後は、審判員としての豊富な経験と指導者の立場から、日本のみならずアジアのサッカーレフェリー界の発展に尽力。1985 年からは、JSL、Jリーグの規律委員長として、フェアプレーの徹底を信条にトップリーグの現場で審判員の統率、育成に力を注いだ。

また、1955年から指導にあたっている中央大学ではチームを数度の全国制覇に導くとともに、40年以上に亘り学生を率いて巡回指導を展開、日本各地でサッカー普及の芽を育てた。その功績により2001年IOC・FIFAより国際ボランティア年表彰を受けた。

1967年CSKAモスクワ戦

1975年FCバイエルン戦

■松本育夫 Ikuo MATSUMOTO

●1941年11月3日、栃木県生まれ

1960年第2回アジアユース大会に出場し3位に貢献。早稲田大学に入学後18歳で日本代表に抜擢される。
4年の時には、関東大学リーグ、全日本大学選手権、天皇杯全日本選手権優勝の三冠。

東洋工業では快速の左ウイングとしてJSL4連覇（1965～68年）を支え、メキシコオリンピックの日本代表では主として右ウイングでプレーし、3位決定戦を含む4試合に出場、チームの銅メダル獲得に貢献。豊富な活動量を生かして攻守両面でコンスタントな活躍し、長沼健監督からの厚い信頼を受けた。日本代表として58試合出場、7得点（1960～69年）。

JSLでは優勝5回（1970年優勝時は主将。東洋の優勝回数5は読売と並びJSL記録）、天皇杯全日本選手権優勝3回。
1966年JSLスターボール賞、JSL年間優秀11人賞受賞。JSL1部（東洋）88試合出場、31得点（1965～73年）。

引退後は指導者となり、東洋工業コーチを経て1976年監督。サッカー人気が低迷するなか、
日本で開催された1979年の第2回ワールドユース大会（現FIFAU-20ワールドカップ）
では日本ユース代表の監督をつとめ、1次リーグ敗退に終わったものの、闘志あふれる
試合を実現して日本中の若い世代を熱狂させ、希望をつないだ。

1990年代以降には川崎フロンターレ、サガン鳥栖などの監督を歴任、情熱的な指導で
川崎をJ1昇格に導き、鳥栖もJ2の上位に引き上げた。サッカーを愛する若者たちを
全身全霊で導く姿は、現代のサッカーにおいて非常に尊いものといえる。

サガン鳥栖監督時代

1979年FIFAワールドユース選手権大会